「議論」と「論議」に関する議論

峯　　正志

1．はじめに

中級や上級の日本語学習者を教えていて最もよく質問されるもののひとつは、類義語の問題である。「この単語とこの単語は意味がどう違うのか」と、よく質問されるが、満足に答えられないことが多い。

本稿で取り上げる「議論」と「論議」もそのようなものの一つである。この論文を書いたのも、実はある韓国人留学生から受けた質問が動機になっている。その留学生によれば韓国語では「議論」は使わないというのである。日本では「論議」も「議論」もともに使われているようだが、どんな使い分けがあるのかという質問であった。

以下は、彼の質問に対する私からの現時点における回答である。

2．現行の国語辞書における記述

まず現行のいくつかの国語辞書において、この二つの語がどのように説明されているか見てみよう。

まず、どちらの語にもほとんど同じ記述が当てられていて両者の区別がつかないものから挙げてみる。

小学館国語大辞典言泉によれば、「議論：互いに、自己の意見を述べ、論じ合うこと。」「論議：論じはかること。意見を述べ、論じ合うこと。議論。」とある。

また、小学館新選国語辞典によれば、「議論：問題を解決するために、意見を論じたり、批評をしあったりすること。また、その意見や批評。」「論議：意見を述べあうこと。議論」とある。

三省堂大辞林によれば、「議論：それぞれの考えを述べて論じあうこと。また、その内容。」「論議：(1)ある事柄について意見を出し合うこと。意見をたたかわせること。」とある。

講談社カラー版日本語大辞典によれば、「議論：意見をたたかわすこと。互いに自分の節や考えを出し、批評し、意見を交わし合うこと。論議。討論。discussion」「論議：(1)論じて定めること・さま。argument　(2)意見を述べ合うこと。議論。discussion」とあ

る。

これらの記述では、「議論」も「論議」も全く同じことになってしまう。

次に、「論議」の方に大きく二つの意味を設け、「論議」は「議論」の意味で使われることもあるという記述もある。

角川新国語辞典によると、「議論：意見を述べ合うこと。」「論議：(1)論じて理非を分別すること。(2)互いに意見を述べ合うこと。議論。」とある。

また、岩波国語辞典第3版によれば、「議論：自分の考えを述べたり他人の考えを批評したりして、論じ合うこと。その論の内容。」「論議：問答によって理非を明らかにしようとすること。問題の点について議論を戦わせること。議論。」とある。

この記述によると、「論議」には(1)「意見を戦わせる」という意味と(2)「論じて理非を明らかにする」の二つの意味が区別でき、「議論」はそのうち(1)の意味を持つ、ということになる。

広辞苑第3版の記述はよくわかない。「議論：互いに自分の説を述べあい、論じあうこと。意見を戦わせること。」「論議：問答によって理非を明らかにすること。議論。」とあって、「議論」と「論議」に明らかに違う記述がなされているのだが、「論議」の後に「議論」が付け加えられているのは一体どういうことなのであろうか。広辞苑の記述が前者に属するのか、それとも後者に属するのかという問題は、現在のところはっきりしない。

「なお、「議論」の方に、「意見を戦わすこと。およびその内容。」というように、「その内容」という意味を加えたものが見られるが、これは明らかに記述しなければならない事項である。その理由は後に述べる。

さて、辞書のこのような記述に出会った外国人日本語学習者はどのように判断するのであろうか。前者の辞書を調べた学習者は、「議論」も「論議」も同じようなものであるからどちらを使ってもかまわないと判断するかもしれない。後者を使った学習者は、論議の方が意味が広いのだから論議を使っていれば間違いはないのではないかと思うかもしれない。しかし実際、私達日本語話者は「議論」と「論議」を明らかに使い分けていのである。ここに挙げた辞書は、いずれも日本人に対する辞書であるから、これを引いた日本人は何となくわかった気になってそれで満足するのであろう。しかし、外国人学習者にとってはあまり頼りにならないし、真面目な学習者なら欲求不満になるに違いない。[1)]

3．調査方法

さて、この二語の使い分けを調べるために、本稿では次のような方法を用いた。

まず、最初の段階としては筆者の内省を用いて[2)]「議論」の用いられやすい環境・用いられにくい環境、「論議」の用いられやすい環境・用いられにくい環境を、ある程度特定

する。それを実際に用いられた用例で確認し、合わない場合は仮説を修正する。本稿で用いた用例は、いくつかの単行本と２ヵ月分の新聞を用いた。（それらは論文末に一括して明記している。）

４．調査結果

このようにして分析した結果、次のような違いが明らかになった。まず、統語的な面での「議論」と「論議」の違いから述べ、その後、意味的な面での「議論」と「論議」の違いを述べる。

４．１　統語的違い

「議論」と「論議」の間の明らかな違いは、「論議」は論議の対象となる名詞（「～について」を表す名詞）を直接付けて複合語化することができるが、議論はできないという点である。[3]次の例を見てほしい。

１．ａ）政治改革に関する議論
　　ｂ）政治改革に関する論議
２．ａ）政治改革の議論
　　ｂ）政治改革の論議
３．ａ）*政治改革議論
　　ｂ）政治改革論議

このように「議論」の場合は、議論の対象となる名詞を必ず「～関して」「～について」「～の」等で結ばなければならないが、「論議」の場合は何も間に入れず、直接付けても構わない。

この規則はかなり厳密に守られているように思われる。例えば、「～論議」という複合語は、用例が数多く見られるのに対して、「～議論」という複合語は全く見られない（例:（単純）小選挙区制論議；憲法（改正）論議；平和論議；安全論議；ヘア論議；「けじめ」論議；新党論議；選挙制度論議；核論議；景気論議；制服論議；増税論議；再編論議；見直し論議れ「虐待」論議；目的論議；政策論議；合併論議；新空港論議；赤字論議；統合論議；教育論議；PKO 論議；政治改革論議など)。ときおり名詞の前接された「議論」の例が見られたが、それらの前接された名詞は対象を表す名詞（「～について」を表す名詞）ではなく、形容詞的なものであったり、場所を表す名詞などである。[4]例えば、

4．会合で石井部会長が今後の部会議論の基本方針を提示した後、（10/3朝）[5]
（場所を表す名詞「部会での議論」）
5．本格議論に入る前に、言うべきことは全部言っていたのである。（11/12朝）
（形容詞的な要素「本格的な議論」）

また、次の例は非常に紛らわしいが、やはり対象を表す名詞ではない。

6．ただし連記制の導入など現行中選挙区制の枠内での改善議論も排除しない（10/3朝刊）

一見すると、「『現行中選挙区制の枠内での改善』についての議論」と読めなくもないが、これはむしろ「『現行中選挙区制の枠内で改善する』という議論」と捉えるほうが自然である。対象の名詞というより、議論の内容を表す名詞である。このような名詞なら議論に直接前置することができる。例えば、

7．「金丸氏だけではバランスを欠く」という議論が浮上してきた。（9/13朝）

ならば、「バランス欠如議論」と言うことが可能である。

また、上で「～論議」の例を挙げたが、このうち、「～議論」と言い換えることができるものがある。それは「～」の部分に動詞的名詞（verbal noun）か、それに類似したものが来るものであり、意味も「～という議論」というように「内容」を示すものとなっている。

例：憲法改正議論；増税議論；再編議論；見直し議論；虐待議論；合併議論；統合議論；政治改革議論；教育議論；「けじめ」議論

一方、「～」の部分に普通の名詞が来る場合には、言い換えられない。

例：*小選挙区制議論；*平和議論；*安全議論；*ヘア議論；*新党議論；*選挙制度議論；*核議論；*景気議論；*制服議論；*目的議論；*政策議論；*新空港議論；*赤字議論；*PKO 議論

しかし、この複合語は現実にはあまり用いられない傾向がある。今回の調査でも、わずか一例しかなかったし、なによりも、この意味では「～論」という言い方の方が普通だからである。

例えば、「収奪論」（長谷川(1) p.31）、「経済侵略論）（長谷川(1) p.31）、「新改憲論」（12/17朝）、「公平負担論」（12/17朝）、「環境対策論」（12/17朝）などである。

しかし、今回調べた中で、たった一例だが、対象名詞と思われるような名詞が「議論」に前接している例がある。

8．そこから日本の将来の政党議論が生まれてくる、と私はみているからである。（大前　p.104）

このような例は、筆者はおかしいと感じるのだが、このような用い方をする人がいるということは認めなければならないだろう。

では、なぜこのような違いが見られるのであろうか。一つの説明としては、上で述べたように、名詞としての「議論」に「意見を戦わすこと」という意味だけでなく、「その内容」という意味があることが考えられる。名詞としての「論議」にはそのような意味はない。「議論」という名詞には「議論の内容」という意味が深く結び付いているため、名詞が前接した場合、「～という議論」と捉えられやすいのではないだろうか。そう考えれば、「～についての議論」という意味での「～議論」は、一般的でないため非文法的と感じられるということで説明できる。「～という内容」という意味を持たない「論議」の場合、自然に「～についての論議」と捉えられるのであろう。このような意味で、名詞としての「議論」には「その内容」という意味を是非記載すべきであろう。[6]

4．2　意味的違い

では、次に意味的な違いを考えてみよう。

まず第2章で述べた辞書の記述から考えると、もし両者をあえて区別するのならば、「議論する」は「様々な意見を戦わせる」、「論議する」は「物事の理非を明らかにするために話し合う」とするというのが、従来の見解と考えてよいだろう。「論議（する）」の語義の中に「議論（する）」が出て来るのは、「論議（する）」の場合「物事の理非を明らかにするため」とは言っても、結果として「話し合う」のであるから、「議論（する）」と同様の意味を持つことになると考えているからであろう。

しかし、上の「議論する」の語義で「様々な意見を戦わす」というのは、結局「物事の理非を明らかにするため」ではないのだろうか。そのような目的無しに意見を戦わすことがあるのだろうか。

筆者は、「物事の理非を明らかにするため」は両者に共通に見られる素性であって、両者を区別するものではないと考える。では、いったい何が両者を分けているのか。

まず、筆者の直観では「議論」の方が「論議」より行為そのものを具体的に示しているようである。例えば、次のような問いに対しては、「論議する」よりも「議論する」の方が使われやすいであろう。

9．「隣の部屋で２時間も一体何をやっているのだ？」

a）　「予算のことで議論しているんだ。」

b）？「予算のことで論議しているんだ。」

また、単に「論議する／議論する」を比較するだけでは、その違いははっきり分からないけれども、次のような例ではどうだろう。

10. a）論議になった

b）議論になった

この表現を比較すれば、1）は「話題となった」というぐらいの意味だが、2）なら、行為の「激しさ」が感じられ、極端な場合「喧嘩になった」ような意味にも取られる可能性があり、かなり違いがはっきりする。

多くの辞書が「議論」について「意見を戦わすこと」というように「戦う」という表現を用いていることは、この違いを捉えたものであろう。

実際、「行為」そのものが問題となっている場合、「論議」は使いにくいように思われる。次の例を見て欲しい。

11. 私がアメリカで英語で議論していても「日本人なのに英語が上手ですね」と言われることはめったにない。（大前　p.20）

12. しかも、そうした私の遊び心は、どの国に行っても、どんなに偉い肩書きの人と会っても気後れすることなく堂々と議論する上でも役に立った。（大前　p.38）

これらの例はいずれも「具体的」な「行為」としての「議論」である。「英語で」行ったり、「堂々と」行ったりするのは、「議論」というわけである。

さて、このように、素朴な直感では、「議論する」の方に「行為性」あるいは「具体性」が感じられるということになりそうだが、もう少し詳しくみてみると別の違いが現れてくる。

具体的に意見を交わす行為が行われた場合に「議論する」を、そうでなく抽象的にあるいは習慣・継続的に行われた場合に「論議する」を使うように感じられるが、そうでない例も多い。例えば、

13. 自民党政治改革本部二十九日の拡大幹事会で、宮沢首相が目指している抜本的な政

治改革案作成について論議した。[7]（10/1朝）

このような例から、両者は「行為性・具体性」だけで異なっているのではないことがわかる。そこで、可能性のあるもう一つの違いを挙げてみたい。それは、「自分の意見の正しさを通そうとする」という意義素性である。これは次のような例に示唆されている。今回集めた用例の中で、「議論」の場合、対立している複数のグループが主語である例が3例あったが、「論議」の方は無かったということである。典型的なのが次の例である。

14. 推進派と反対派が論点をそらすことなく、真正面から議論して問題点を洗い出すこも（筆者：「洗いだすことも」の誤植と思われる）大切だ。（10/20朝）

対立するグループであるから「話合い」の激しさが増し、つまり「行為性」が増し、その結果「議論」が用いられたのだという解釈も可能だが、筆者の内省では「自分の意見を通そうとして」というニュアンスの方が強いように思われる。

この傍証のように思われるのが次の事実である。非常に見逃され易く、それ故、辞書にも明記されていないが、「議論する」には「論議する」と全く異なった語義があるということである。それは、「（議論の中で）～という意見を述べる」という意味である。「～かどうか」の後には「議論する」も「論議する」も来ることができる。しかし、「～であると」や「～であることを」の後には「議論する」しか来ない。今回集めた用例の中にはこのような例はなかったが、上で挙げた11)、12）の例文などはそれに非常に近い意味を持っていると言えるであろう（あるいはその意味で使っているのかも知れない。）。あえて作ってみるとすると、次のような例はどうだろうか。

15. 彼は委員会で政治改革が必要であることを堂々と議論した。

このような意味を「議論」が持っているということを考え合わせると、単なる「行為性」でなく、「自分の意見を通そうとする」という意義素性があると考えた方がよさそうである。

そこで、以上を念頭に「議論する」と「論議する」のプロトタイプを考えると次のようになるのではないだろうか。

16. a）「論議する」のプロトタイプは「解決法を見つけるために意見を交換する」
    b）「議論する」のプロトタイプは「解決法を見つけるために意見を交換する」という点では「論議」と同じだが、互いに自分の意見を認めさせるために意見を戦

わせるというニュアンスが感じられる。

従って、「自分の意見を通そうと激しく意見を述べあう」という意味が強ければ強いほど「議論する」を、それが弱ければ弱いほど「論議する」が用いられると考えられる。ただ、「意見を認めさせるのが目的」だから「意見を戦わせる」のか、「意見を戦わせる」から「意見を認めさせる」ように感じられるのか、つまり、どちらがより基本的なのかは、厳密に言えばはっきりしない。本稿では、「議論する」に「自分の意見を述べる」という意味があることから「意見を認めさせる」方が基本的であるように考えたが、「激しく意見を戦わせる」から「自分の意見を押し通そうとする」という意味が生じてきた可能性もあるからである。いずれにしても、この二つの素性が互いに非常に密接であることは明かであろう。

「はじめに」で述べた韓国人留学生には、現在のところ、以上のように答えたいと思っている。

現行の辞書に関して言えば、「議論する」が持つ「(議論において) 自分の意見を述べる」という語議は「論議する」には見られない用法であるので、できたら書き加えるべき項目であると考える。

最後に、一つ気が付いたことを指摘しておきたい。それは、「論議」と「議論」の使用頻度についてである。新聞では比較的「論議」が使われやすいのに、単行本では「議論」が多く現われるということだ。今回調べた三冊の単行本では、「議論」59例に対し「論議」8例である。これは上で述べたような意味的違いに基づくものである可能性を否定できない。つまり、新聞の様に客観的・中立的に記述しなければならない (少なくとも建前上は) メディアでは、感情的により冷静な「論議」の方が好まれるということであろう。

5. 結　論

以上の議論をまとめてみよう。「議論」も「論議」もともに「異なった意見を出してその理非を明らかにする」という行為を示す類義語であるが、その意味は微妙に異なっており、また統語的振る舞いもいくぶん異なっている。

統語的振舞いの違いとしては、「議論」は「論議」と違い、他の名詞が前接して複合名詞になった場合、「～についての議論」にはならないことを指摘した。また、この原因は「議論」の持つ「(議論で出てきた) その内容」という語義によるものである可能性を示唆した。

意味的違いとしては、「議論」の方に「自分の意見を通そうとして激しく意見を述べあう」のニュアンスがあることを述べた。また、動詞の「議論する」には、辞書には明記さ

れていないが「(議論の中で) 自分の意見を述べる」という語義があり、それが「議論する」の持つ「行為性」を高めている可能性を示唆した。[8)]

6．おわりに

類義語の研究は、外国人日本語学習者にとって大変有益なものであり、また必要なものであると考える。これからもさらに様々な類義語について同様の研究を行なっていきたい。

注

1）参考までに、和英・和仏・和独辞典で、この二つがどのように訳し分けられているか、いくつか見てみよう。

三修社現代和独辞典では、「giron: die Diskussion; die Debatte」「rongi: eine Diskussion」となっており、特に訳し分けていない。

三省堂コンサイス和仏辞典では、「ぎろん：discussion f; controverse f; débat m; argument m;「論争」polémique f;「言い争い」dispute f.」「ろんぎ：discussion f; débat m.」となっており、これも特に訳し分けていない。しかし「議論」の方に、特に「論争」「言い争い」との項目が設けられており、第4章で取り上げる、「議論」のもつ行為性がとらえられているようである。

これと同様に、研究社大和英辞典でも「giron:［論］an argument;［討議］a discussion;［論争］a controversy; a dispute（口論）; word warfare; a debate;［論点］an issue」「rongi: (a) discussion; (an) argument; (a) debate［＝giron］」となっており、「議論」の方に「論争」「口論」の意味が記載されている。しかし、「論議」の方の語義には「議論」の中に出てきた訳語しか出てこず、［＝giron］(「議論と同じ」) の記載さえある。

一般的に言って、「言い争い」の語義が「議論」にある以外は「議論」も「論議」も同じ、というのがこれら2カ国語辞書の記載である。

2）内省を利用したため、本稿で得られた結果は、他の人の言語直観に合わない点もあるかも知れない。

3）影山・柴谷（1989）によれば、複合語にも「語彙的複合語」と「統語的複合語」があるという。しかしここでいう「統語面」とは、彼らの言う「統語的複合語形成」のことを指しているわけではない。ここで「統語的」と表現した問題は、どのような意味役割を持った名詞を「論議」なり「議論」が複合語の前要素として取りうるかということである。ここで扱った「～論議」と「～議論」は、彼らの分類ではともに「語彙的複合語」となるであろう。アクセントの山を一つしか持たないからである。例えば、「論議」の場合、「ヘア」も「核」も「論議」が後にくるとアクセントの型が変わる。例：

ヘア → ヘア論議（*ヘア論議）；　核 → 核論議（*核論議）

また「議論」の場合も、「欠如」などは後に「議論」が来るとアクセントの型が変わる。例：

欠如 → 欠如議論（*欠如議論）

4）もちろん、「論議」の場合もこのような要素を取ることができる。例えば、「党内論議」「国会論議」（場所を表す名詞）；「ユニーク論議」（形容詞的な要素）。

5）略号の見方は次の通り：10／3朝＝10月3日付け朝刊；9／21夕＝9月21日付け夕刊大前＝大前（1991）；長谷川(1)＝長谷川（1990）；長谷川(2)＝長谷川（1992）

6）「その内容」という意味は「論議」にはないのだが、用例に1例だけ、「～という論議」の例があった。

アクセス問題を持ち出すと、必ず「だから現空港で東京便を残す必要があった」という論議の蒸し返しになり、収拾がつかなくなる恐れがあるからだ。
(10／20朝)

しかし筆者には、「～という、論議の蒸し返しになり」のように「という」と「論議」は結び付いていないように感じられる。ちなみに、「～という議論」は9例あった。

7）もっともこのような例では、「議論」と置き換えても十分適格な文となる。

8）名詞としての「議論」に「その内容」という語義があるのは、おそらく動詞としての「議論する」にこのような語義があることと関係しているのではないだろうか。

引用文献

影山太郎・柴谷方良（1989）「モジュール文法の語形成論－「の」名詞句からの複合語形成」久野すすむ・柴谷方良編『日本語学の新展開』所収。くろしお出版。東京。

使用した辞書

広辞苑第3版　1983
三省堂大辞林　1988
小学館国語大辞典言泉　1986
講談社カラー版日本語大辞典　1989
角川新国語辞典　1987（第7 3版）
岩波国語辞典第3版　1982（机上版第1刷）

用例採集に用いた書籍・新聞

1）書　籍

大前研一（1991）『生活者革命－国家主義の終焉』日本放送出版協会。東京。
長谷川慶太郎（1990）『経済頭脳を持っているか』青春出版社。東京。
長谷川慶太郎（1992）『1992年　長谷川慶太郎の世界はこう変わる』徳間書店。東京。

2）新　聞

平成4年9月1日から10月31日までの中国新聞朝刊および夕刊（一部、これ以外の日付の資料も用いた。）